
【オマ芥川】あばばば

アサキタツナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【オマ芥川】あばばば

【コード】

N9870M

【作者名】

アサキタツナ

【あらすじ】

芥川龍之介の短編「あばばば」のオマージュです。本家の中から、2つテーマを頂き、膨らませましたが、本筋は変えていません。

(前書き)

芥川龍之介の短編「あばばば」のオマージュ作品です。「こんなふざけたタイトルの作品がああ芥川さんの小説にあるわけないだろ！」って思った方、本家をぜひ読んでください。芥川の懐の深さにきつとはまりますよ。

あ、一応、私のオマージュ作品を読んでからがいいですが・・・まあ、近代文学普及のために、これからもこのシリーズやっています。

保吉はずつと以前からこの店の主人を知っていた。今の学校に赴任する以前、偶然にも立ち寄った事がきっかけだった。コンビニエンスストアもそれほどない田舎で、生活用品全般を扱っている商店というのは貴重だった。もっとも、保吉のコンビニ利用はタバコや飲み物を買うというのが常ではあったが、自動販売機も少ない事を考えると非常に貴重な店だ。

田舎の封鎖的な雰囲気がそうさせるのか、店主は仏頂面で愛想は悪い。初めて寄ったときは、ライターを買おうとして店内を探したが見つからず、聞きたくはなかったが仏頂面のよそ者寄せ付けない店長に聞いてみた。

「ん、きらしてるか。じゃあ、これを持っていきな」

と、胸ポケットからライターを差し出した。

それでは悪いと思い、

「それじゃあ、悪いから。じゃあ、ラークも二つ」

「かまわないから、持っていきな」

「いや、まあラークも二つ買っよ」

「いいから、いいから。余分なものまで買わなくてもいいだろ」

やり取りだけを聞いていれば、とても親切な店主には違いないのだが、ぶっきらぼうに言い放つ言葉の端々には、うっとうしさがにじみ出ていた。いかにも早く出て行ってくれという感じで。

ここでおとなしくライターを貰っているようでは、負けたような気がする。すると都合のいい事に、雑誌の配達車がやってきて、新しい雑誌を納品しようとしていた。

そこで私は愛読書を見つけたので、

「これを買っていいかな？」

と切り抜けた。

主人はまたしても仏頂面でうなずいてバーコードを読み取った。

そして、この店は、通勤路という事もあって保吉が毎日通う店になっていた。コンビニがない田舎ではあるが、この店があれば事足りるほどのラインナップであるから、不便は感じなかった。さらに、普通にコンビニで買うよりは安い事もあって、職場近くのコンビニもあまり利用しなかった。

そして、今時珍しい商店というのにも気に入っていた。自動ドアではないガラス戸、そして床はコンクリートで並べてある野菜の水気をすっけていて湿っている。天井からは裸電球の明かりが薄く店内を照らし、クーラーではなく扇風機が店内を冷やしていた。

並んでいる商品も生前と整理されているわけではなく、空いたスペースを見つけてそこに置いてあると言った感じだ。

しかし、当初は目新しかったこの店も、一年近く通っているうちに保吉の日常になってしまい、退屈なものになっていた。

あの仏頂面の店主とのやり取りでさえも、機械的な日常の一つになっていた。変化が少ないのはいい事でもあり、悪い事でもある。ところが変化は突然おこった。いつものように店にいくと、店主が不在だった。その代わりにレジには若い女がいた。派手な化粧もなく、地味ながらそれでいて整った顔立ちをした女だった。

「あれ、店主は？」

保吉は気になって思わず尋ねた。

「あ、あ、はい、主人は配達に出かけています」

消え入りそうなか細い声で、保吉と目線を合わせずに答える。なるほど、配達業務を始めるにあたって、奥さんに店を任せただのか。それにしても、あのぶっきらぼうな主人にしては、ずいぶんと釣り合わない奥さんを貰ったようだ。

「じゃあ、ラークを」

と、保吉はいつものように注文をした。女ははっとしたかのように、目線を泳がせる。やがて保吉の視線が女の奥のタバコが置かれているあたりに注がれると分かり、

「た、タバコですね」

と早口で言つて、たくさん並んだ銘柄の前で右往左往し始める。どうやらラークがどれかも分からないようだ。

「その左側の赤いやつだよ。青いやつが並んでいる下にあるだろ」
女は何度も「はい」と小刻みに繰り返して、ようやく目当てのものを探してくれた。

会計を住ませる間もずっと視線を合わせない。保吉としては、この臆病で人見知りな女の方が、横柄な主人の対応よりも心地よかった。それに何よりも、退屈な日常の刺激にはなった。

最も、これも今日限りの出来事だろう。そう思っていたが、実際は違っていたようだ。

翌日も、女がレジにたっていた。主人はいない。

どうやら、主人は配達、女は店番と明確な役割分担をしたようだ。毎日女のつたない接客と、商品知識、何度も「すみません」と言いながら、対応しているのを見ると、保吉の心に悪魔が芽生えた。わざと難しい注文を試してみたのだ。いつもの以外に、女がまず知らないであろう商品を羅列してみた。

女は一応探すそぶりをするが、初めて聞いた商品がなんであるかも分からないので、結局はうつむきながらおどおどしつつ、保吉に「すみません」と、震える声で聞き直す。

それからの保吉は、彼女の対応を楽しむ事が日課となっていた。いつまでたつても慣れない客への対応が、保吉の加虐心を満たしていた。ちよつとした事だが、退屈な日常に倒錯した欲求を満たしてくれるこの女が、保吉にとってかけがえのない、生活の潤いになっていた。

もちろん、彼自身はまだそんな自分の欲求と性癖に気づくはずもない。ただ、女がおどおどしながら接客をする、その姿が見たいだけだった。

しかし、待ち望んでいた日常もあっさりと終わりをつげた。いつ

ものように、保吉が商店へ顔を出すと、レジで待っていたのはあの仏頂面の主人だった。

「奥さんはどうしたんだい？」

と聞きたくてたまらなかったが、彼のプライドが邪魔をして聞く事はできなかった。自分が彼の奥さんに関心があると思われては、嫌だった。他人の女に興味を持つような、自分ではない。そんな風に思われてはたまらない。保吉は歪んだ自尊心から、いつも通りの買い物をして店を出た。

ただ、以前のように欲求を満たしてくれる事は、全くなかった。

それから数ヶ月後、商店をのぞいてみると女がいる事に気づいた。赤子を背負って、レジにたっていた。保吉は蝶が花に惹かれるように、用もないのにふらふらと商店へ入っていった。

いつものように、難しい注文を出して困らせてみたい。即座にそう思った。そして、商店の中にありそうで、女が把握していないだろう売り物を探し始める。

女は少しぐずつき始めた赤子を背中から降ろしてあやしているようだ。そのとき、保吉は信じられない姿を見た。

女は赤子に向かって、変な表情を作り、

「あばばばばば、ばあ！」

とあやしたのだ。

そして、店内に唯一いた客の保吉に向かって、

「すみません。うるさくて」

と笑顔で挨拶をした。

その瞬間に保吉は悟った。もう、あの女はいないのだと。ここにいるのは、母親だ。あのおどおどした、自分を悦ばせる女はもう母親に変わったのだと。

何も買わずに店を出て、保吉は一人にやにや笑った。これは望ましい事だ。あの初々しい女は、図々しい母親という生き物へと変化をした。保吉は心の底から祝福をするべきだと思った。

そして、空を見上げると丸い月が薄く空にあがっていた。
保吉は、しばらく呆然としながら夕闇に染まる空の中の、その薄
い色の月を眺めながら家路へついた。

？了？

(後書き)

近代文学普及のための「オマージュシリーズ」第二弾です。

楽しんでくれたら幸いです。

また、感想以外でもこの作家をやってほしいというのがあれば、ぜひお聞かせください。

次は谷崎潤一郎あたりを考えています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9870m/>

【オマ芥川】あばばば

2010年10月8日13時40分発行